

最後の胡弓弾き

新美南吉

青空文庫

一

旧の正月が近くなると、竹藪たけやぶの多いこの小さな村で、毎晩鼓つづみの音と胡弓こきゅうのすすりな
くような声が聞えた。百姓の中で鼓と胡弓のうまい者が稽古けいこをするのであった。

そしていよいよ旧正月がやって来ると、その人たちは二人ずつ組になり、一人は鼓を、
も一人は胡弓を持って旅に出ていった。上手じょうずな人たちは東京や大阪まで行って一ひと月つきも
帰らなかつた。また信州しんしゅうの寒い山国へ出かけるものもあつた。あまり上手でない人や、
遠くへいけない人は村からあまり遠くない町へいった。それでも三里はあつた。

町の門かどごとに立つて胡弓弾ひきがひく胡弓にあわせ、鼓を持った太夫たゆうさんがぼんぼんと鼓
を掌てのひらで打ちながら、声はりあげて歌うのである。それは何を謡うたっているのやら、わ
けのわからないような歌で、おしまいに「や、お芽出めでとう」といつて謡いおさめた。する
と大抵たいていの家では一銭銅貨をさし出してくれた。それをうけとるのは胡弓弾きの役目だつ
たので、胡弓弾きがお銭あしを頂いただいているあいだけ胡弓の声はとぎれるのであつた。たまに
は二銭の大きい銅貨をくれる家もあつた。そんなときにはいつもより長く歌を謡うのであ

る。

ことし十二になった木之助は小さい時から胡弓の音が好きであった。あのおどけたような、また悲しいような声をきくと木之助は何ともいえないうつとりした気持ちになるのであった。それで早くから胡弓を覚えたいと思っていたが、父が許してくれなかった。それが今年は十二になったというので許しが出たのであった。木之助はそこで、毎晩胡弓の上手な牛飼うしかいの家へ習かよいに通かよった。まだ電燈がない頃ころなので、牛飼の小さい家には煤すすで黒い天井から洋燈ランブが吊つり下さがり、その下で木之助は好きな胡弓を牛飼について弾いた。

旧正月がついにやって来た。木之助は従兄いとこの松次郎と組になって村をでかけた。松次郎は太夫さんなので、背中に旭日あさひと鶴つるの絵が大きく画かいてある黒い着物はれぎをき、小倉こくらの袴はかまをはき、烏帽子えぼしをかむり、手に鼓を持っていた。木之助はよそ行きの晴衣はれぎにやはり袴かどつをはき、腰に握り飯の包みをぶらさげ、胡弓を持っていた。松次郎はもう二度ばかり門附かどづけに行つたことがあるので、一向平氣だったが、始めての木之助は恥はづかしいような、誇らしいような、心配なような、妙な氣持だった。殊ことに村を出るまでは、顔を知つた人たちにあうたびに、顔がぼつと赧あかくなつて、いつそ大きい風呂敷ふろしきにでも胡弓を包んで来ればよかったと思つた。それは父親が 大奮発だいふんぱつで買つてくれた上等の胡弓だった。

二人が村を出て峠道にさしかかると、うしろから、がらがらと音がして町へ通つてゆく馬車がやつて来た。それを見ると松次郎はしめしめ、といった。あいつに乗つてゆく、といった。

木之助はお錢を持っていなかったの、

「おれ、一錢もないもん」というと、

「馬鹿だな、ただ乗りするんだ」と言つた。

馬車は輪鉄の音をやかましくあたりに響かせながら近附いて来た。いつもの、聾の爺さんが馭者台にのつていた。それは木之助の村から五里ばかり西の海ぼたの町から、木之助の村を通つて東の町へ、一日に二度ずつ通う馬車であつた。木之助と松次郎は道のぐろにのいて馬車をやりすごした。

馬車のうしろには、乗客が乗り下りするとき足を掛ける小さい板がついていた。松次郎はそれにうまく跳びついて、うしろ向きに腰をかけた。木之助の場所はもうなかったの、木之助は馬車について走らなければならなかった。胡弓を持っているし、坂道なので木之助はふうふう言いながら走つたが、沢山走る必要はなかった。

馬車は半町もいかないうちにぴたとまつてしまった。松次郎は慌てて跳びおりた。

ほつぽこ頭巾ずきんから眼めだけ出した馭者の爺さんが鞭むちを持って下りて来た。

「おれ、知らんげや、知らんげや」と松次郎は頭をかかえてわめいた。しかし爺さんは金かなつんぽ

聲こゑ だったので何も聞えなかった。ただ長年の経験で、子供一人でもうしろの板にのるとそれが直体すくに重く感ぜられるので解わかったのであった。「この馬鹿めが」といって、鞭の柄えの方でこつんと軽く松次郎の耳の上を叩たたいた。そしてまた馭者台に乗ると馬車を走らせ、
ていつてしまった。

松次郎は馬車のうしろに向むかつて、ペラリと舌を出す、

「糞くそ爺ぢいの金く響せき」と節ふしをつけていつて、ぽんぽんと鼓をたたいた。そして木之助と一し
よに笑い出した。

二人が三里の道を歩いて町にはいつたのは午前十時頃ころだった。

二

町の入口の餅屋もちやの門かどから始めて、一軒一軒のき伝いに、二人は胡弓をならし、歌うたを謡うたつて
いった。

一番始めの餅屋では、木之助はへまをしてしまった。胡弓弾きはいきなり胡弓を鳴らしながら賑やかに鬺しきいをまたいではいつてゆかねばならないのだが、木之助は知らずに、

「ごめんやす」と言つてはいつていつた。餅屋の婆ばあさんは、それで木之助を餅を買いに来たお客さんと間違えて、

「へえ、おいでやす、何を差しあげますかなも」と答えたのである。木之助は戸惑いして、もどもぞしていると、場なれた松次郎が、びつくりするほど大きな声で、明けましてお芽出とうといいながら、鼓をぽぽんと二つ続け様にうってその場をとり繕つくろつてくれた。その婆さんは銭箱ぜにばこから一銭銅貨を出してくれた。木之助は胡弓を鳴らすのをやめて、それを受け取り袂たもとへ入れた。

表に出ると松次郎が木之助のことを笑つて言つた。

「馬鹿だなあ。黙つてはいつてきやええだ」

それからは木之助はうまくやることが出来た。大抵の家では一銭くれた。五厘りんをくれる人もあつた。中には、青く錆びた穴あき銭を惜しそうにくれる人もあつた。二銭銅貨をうけとつたときには木之助は、それが馬鹿に重いような気がした。しっかりと掌てに握つていて外に出るとそーつと開いて松次郎に見せた。二人は顔を見合わせほほえんだ。

もうお午を少しすぎた。木之助の袂はずしんと横腹にぶつかるほど重くなった。草鞋わらじばきの足にはうつすら白い砂すなほこり埃もつもった。朝から大分の道のりを歩いたので腹が空すいていたが、弁当べんとうを使う場所がなかなか見つからなかった。もう少しゆくと空地あきちがあつたから行こうと松次郎が言うので、ついて行つて見るとそこには木の香かも新しい立派な家が立つていたりした。

腹がへつては勝かちはとれぬから、もう仕方がない、横よこ丁ちようにでもはいつて家のかげで食べようと話をきめたとき、二人は大きい門もん構がまえの家の前を通りかかった。そこには立派な門かどまつ松が立ててあり、門の片方の柱には、味噌溜みそたまりと大きく書かれた木の札ふだがかかっていた。黒い板塀いたべいで囲まれた屋敷は広くて、倉のようなものが三つもあつた。

「あ、ここだ、ここは去年五銭くれたぞ」と松次郎がいった。で二人は、そこをもう一軒すましてから弁当をとることにした。

木之助が先になつてはいつてゆくと、

「う、う、う……」と低く唸うなる声がした。木之助はぎくりとした。犬が大嫌だいきらいだつたのだ。

「松つあん、さきいつてくれや」と松次郎に嘆願すると、

「胡弓がさきにはいつてかにや、出来んじやねえか」と答えた。松次郎も怖こわかったのに違ちがいない。

木之助は虎とらの尾でもふむように、びくびくしながら玄関の方へ近づいてゆくと、足はまた自然にとまってしまった。大きな赤犬が、入口の用水桶ようすいおけの下にうずくまってこちらを見ているのだった。

「松つあん、さき行つてや」と木之助は泣きそうになっていった。

「馬鹿、胡弓がさき行くじやねえか」と松次郎は吐き出すようにいったが、松次郎の眼めも恐ろしそうに犬の方を見ていた。

二人は戻もどつて行こうかと思つた。しかし五銭のことを思うと残念だった。そこで木之助が勇氣を出して、一足ふみ出して見た。すると犬は、右にねていたしっぽを左へこてんとかえした。また木之助は動けなくなつてしまった。

五銭は欲ほしかったし、犬は恐ろしかったので、二人は進退に困っていると、うしろから誰かがやつて来た。この家の下男げなんのような人で法被はっぴをきていた。木之助たちを見ると、

「小さい門附けが来たな、どうしただ、犬が恐れおそえのか」といって人が好きよそうに笑つた。犬はその人を見るとむくりと体を起して、尾を三つばかり振つた。その男の人は犬の頭を

なでながら、

「よしよし、トラ、おうよしよし」と犬にいい、それから木之助たちの方に向いて、

「この犬はおとなしいから大丈夫だ。遠慮せんではいれ、はいれ」とすすめた。

「おつつあん、しつかり掴んどつてな」と松次郎が頼んだ。

「おう、よし」と小父おじさんは答えた。

トラ——恐ろしい名だな、おとなしい犬だと小父さんはいったが嘘うそだろう、と木之助は思いながら立派な広い入口をはいった。

正面に衝立ついたてが立っていて、その前に三宝さんぼうが置いてある、古めかしいきれいな広い玄関だった。胡弓や鼓の音がよく響き、奥へ吸いこまれてゆくようで自分ながら気持ちよかった。

この家の主人らしい、頭に白髪しらがのまじったやさしそうな男の人が衝立の蔭かげから出て来て、木之助と松次郎を見ると、にこにこ笑いながら、

「ほつ、二人とも子供だな」といった。

木之助は、子供だから五銭もやる必要がないなどと思われてはいけなと、一層心をこめて胡弓を弾いた。

一曲終ったとき主人は、

「ちよつと休めよ」といった。変に馴れなれしい感じのする人だ。松次郎は去年も来て知っていたが木之助は始めてなので妙な気がした。

ちよつと休めよなどと友達にでもいうように心安くいつてくれたのはこの人だけである。木之助はぼけんとつたつたつた。五銭はくれないのか知らん。胡弓が下手いのか。

「こつちの子供は去年も来たような気がするが、こつちの（と木之助を見て）小さい方は今年（ことし）はじめてだな」

木之助は小さく見られるのが癪だったので解らないようにちよつと背伸びした。

「お前たちは何処から来たんだ」

松次郎が自分たちの村の名を言った。

「そうか、今朝（けさ）たつて来たのか」

「ああ」

「昼飯、たべたか」

「まだだ」と松次郎が一人で喋舌しゃべつた。「弁当持つとるけれど、食べるところがねえもん」
「じゃ、ここで食べていけよ、うまいものをやるから」

松次郎はもそもぞした。五銭はいつくれるのか知らんと木之助は思った。

二人がまだどっちとも決めずにいるうちに、主人は一人できめてしまつて、じゃちよつと待つておれよ、といつて奥へ姿を消した。

やがて奥から、色の白い、眼の細い、意地いじの悪そうな女じょちゆう中なかつが、手に大きい皿さくらを持つて出て来たが、その時もまだ二人は、どうしたものかと思案しあんにくれて土間どまにつつたつていた。

女中はつんとしたように皿を式台しきだいの上に置くと、

「おたべよ」と突慥つつけんとん貪どんにいつて、少し身を退ひき、立ったまま流しめに二人の方を見おろしていた。皿の中にはうまさうな昆布卷こんぶまきや、たつくりや、まだ何かが一ぱいあつた。

「よばれていこうよ」と松次郎がいつた。木之助もたべたくなつたのでうんと答えて胡弓を弓と一しよにして式台すみの隅の方へそつと置くと、女中は胡弓をじろりと見た。

松次郎と木之助は、はやく女中がひつこんでくれないかなと思ひながら、式台に腰をお

ろして腰の風呂敷包ふろしきつづみをほどいた。中から竹皮に包まれた握り飯があらわれた。女中はそれも横目でじろりと見た。

食べにかかると握り飯も御馳走ごちそうもすばらしく美味いので、女中のことなどそつちのけにしてむしやむしや頬張ほおばった。女中はじつとそれを見ていたが、もう忪こらえられなくなったと見えて、

「まあ汚きたない足」といった。松次郎と木之助は食べながら自分の足を見ると、ほんとに女中のいった通りだった。紺足袋こんたびの上に草鞋わらじを穿はいていたが、砂すなほこり埃ごりで真白だった。二人は仕方ないので黙々と御馳走を手でつまんではたべた。

「まあ、乞食こじきみたい」。しばらくするとまた女中が刺すような声でいった。指の間にくつついた飯粒を舌の先でとりながら、木之助が松次郎を見ると、いかにも女中がいった通り松次郎は乞食の子のようにうすぎたなく見えた。松次郎もまた、木之助を見てそう思った。「まあ、よく食べるわ、豚みたい」。木之助が五つ目の握飯をたべようとして口をあいたとき女中がまたいった。木之助は、ほんとにそうだと思つて、ぱくりと喰くいついた。

「耳の中に垢あかなんかためて」。しばらくするとまた女中がいった。木之助は松次郎の耳の中を見ると、果はたして汚く垢がたまっていた。松次郎の方でも木之助の耳の中にたまってい

る垢をみとめた。

やがて衝立ついたての向うに、とんとんという足音が聞えて来ると、女中はついと身を翻ひるがえして何処どこかへ行つてしまい、代りにさっきの優しい主人があらわれた。

「どうだうまいか」といって、主人はそこにかがんだ。松次郎が胸つに悶もえたので拳こぶしでたたいてみると、おやあいつ、お茶を持って来なかつたんだな、いいつけといたのに、と呟つぶやいた。そのとき今の女中がお茶を持って来て、すました顔でそこへ置くとまたひっこんで行った。

「大きな握飯くわはんだな、いくつ持つて来たんだ」と主人は一つ残った木之助のおむすびを見ていった。六つと木之助は答えた。この半白の頭をした男の人は、さっきより一層親したしくなつたように木之助には感じられた。

木之助たちが喰たべ終つて、「ご馳走ちそうさん」と頭をさげると、主人はなおも、いろんなことを二人に話しかけ、訊たずねた。これから行く先だとか、家の職業だとか、大きくなったら何になるのだとか。木之助の胡弓は大層うまいとほめてくれた。木之助はうれしかった。

「こんど来るときはもつと仰ぎようさん山弾やまけるようにして来て、いろんな曲をきかしてくれや」といったので木之助は「ああ」といった。すると主人は袂たもとの底をがささがごと探さがしていて紙

の撚^{ひね}ったのを二つ取り出し、一つずつ二人にくれた。

二人は門の外に出るとすぐ紙を開いて見た。十銭玉が一つずつあらわれた。

四

木之助は、来る正月来る正月に胡弓をひきに町へいった。行けば必ずあの「味噌溜^{みそまり}」と大きな板の看板のさがっている門をくぐった。主人はいつも変らず木之助を歓迎してくれ、御馳走をしてくれた。

木之助は胡弓がしんから好きだったので、だんだんうまくなっていた。始めは牛飼から曲を教わったが、牛飼の知っている五つの曲はじき覚えてしまい、しかも木之助の方が上手^{じょうず}にひけるようになった。するともう牛飼の家に習いにゆくのはやめて、別な曲を知っている人のところへ覚えにいった。隣の村、二つ三つ向うの村にでも、胡弓のうまい人があるということをしきくと、昼間の仕事を早くしまつて、その村まで出かけてゆき、熱心に頼んで新しい曲を覚えて来た。やがて木之助にも妻が出来、子供も出来たが、夜、木之助の弾^ひきならず胡弓の音が邪魔になつて子供が寝つかないというときには、村の南の松林

にはいつていつて、明るい月の光で弾いた。そののんびりした音色は、何事かを一生懸命に物語っているように村人たちには聞えたのである。

だが歳月は流れた。或る年の旧正月が来たとき、こんども松次郎と一しよに門附けにこうと思つた木之助が、前の晚松次郎の家にゆくと風呂にはいつていた松次郎はこういつた。「もうこの頃じや、門附けは流行らんな。ことしあもう止めよかと思うだ。五、六年前まで、東京へ行つた連中も旅費の外に小金を残して戻つて来たが、去年あたりは、何だというじやないか、旅費が出なかつたてよ」

「でも折角覺えた芸で腐らせることもないよ、松つあん」と木之助は励ますようにいつた。「東京は別だよ、場所（都会）の人間はあかんさ」

「だが、俺たちも一昨年、去年は駄目だつたじやねえか。一日、足を棒にして歩いてても一両なかつただもんな。乞食でも知れてるよ」

なおも木之助がすすめると、風呂の下を焚いていた松次郎のお内儀さんがいつた。「木之さん、あんたは大人しいから、たとい五十銭でも貰えば貰つただけ家へ持つて来るからええけど、うちの人は呑ん兵衛で、貰つたのはみんな飲んでしまい、まだ足らんで、持つていつた錢まで遣つてくるから困るよ。それで今年はもう止めておくれやとわたしから頼

んでいるだよ」

一昨年の正月も去年の正月も、一日門附けしたあとで松次郎が、酒のきらいな木之助を居酒屋へつれこみ、自分一人で飲んで、ついにはぐでんぐでんに酔ってしまい、三里の夜道を木之助が抱くようにして帰って来たのを木之助は思い出した。

「一人じゃ行けんしなあ」と木之助が思案しながらいうと、松次郎が風呂から出て、「うん。俺も子供の時分から旧正月といえば、門附けにいつとつたで、今更やめたかないが、女房めがああいうし、実は、こないだ子供めが火箸で鼓を叩いているうち破ってしまっただよ。行くとなりや、あれも張りかえなきやならぬしな」といった。

木之助は仕方がないので一人でゆくことにきめた。自分の身についた芸を、松次郎のようになかそうとしないことは木之助には解らなかつた。何故そんなことが平気で出来るのか考えて見ても解らなかつた。いかにも年々門附けはすたれて来ている。しかし木之助の奏でる胡弓を、松次郎のたたく鼓を、その合奏を愛している人々が全部なくなつたわけではないのだ。尠くとも（と木之助はあの金持の味噌屋の主人のことを思った）、あの人は胡弓の音がどんなものかを知っている。

翌朝木之助は早朝に起き、使いなれた胡弓を持って家を出た。道や枯草、藁積などに

は白く霜が降り、金色にさしてくる太陽の光が、よい一日を約束していたが、二十年も正月といえは欠かさず一緒に出かけた松次郎が、もうついてはいないことは一抹の寂しさを木之助の心に曳いた。

「木之さん、今年も出かけるかな」。木之助が家の前の坂道をのぼって、広い県道に出たとき、村人の一人がそういつて擦れちがった。

「ああ、ちよつと行つて来ますだ」と木之助が答えると、

「由さあも、熊さあも、金さあも、鹿あんも今年はもう行かねえそうだ。力やんと加平が、行こか行くまいかと大分迷つとつたがとにかくも一ぺん行つて見ようといつとつたよ」

そういつて村人は遠ざかつていった。

五

村を出はずれて峠道にさしかかるといつものように背後からがらと音がして町へ通つてゆく馬車が駈て来た。木之助は道のはたへ寄つて馬車をやりすごそうと思つた。馬車が前を通るとき、馭者台の上を見ると、木之助は、おやと意外に感じた。そこに乗つ

ているのは長年見馴れたあの金聾の爺さんではなく、頭を時分けにした若い男であつた。金聾の爺さんの息子に違いない。顔つきがそっくり爺さんに似ていた。それにしてもあの爺さんはどうしたんだろう、あまり年とつたので隠居したのだろうか。あるいは死んだのかも知れない。いずれにしても木之助は時の移りをしみじみ感じなければならなかつた。

しかしその年はまだ全然実入りがなかつたのではなかつた。金持ちの味噌屋はたのしみに最後に残しておいて、他の家々を午前中廻つた。お午までに――木之助は何軒の家がお礼をくれたかはつきり覚えていた――十軒だつた。そしてお礼のお銭は合計で十三錢だつた。最後に味噌屋にゆくと、あの頃からはずっと年とつて、今はいい老人になつた御主人が、喘息で咳き入りながら玄関に出て来て、松次郎がいなのを見ると、おや、今日はお前一人か、じゃまあ上にあがつてゆつくりしてゆけと親切にいつてくれた。木之助は始め辞退したが、あまり勧められるので立派な座敷にাগり、そこで所望されるままに、五つ六つの曲を弾いた。主人はほんとうに懐しいように、うむうむとうなずきながら胡弓に耳を傾けていたが、時々苦しうな咳が続いて、胡弓の声の邪魔をした。いつものように御馳走になつた上多ぶんのお礼を頂いて表に出ると、まだ日はかなり高かつたがもう木

之助には他をまわる気が起らなかった。味噌屋の主人にさえ聴いてもらえばそれで木之助はもう満足だったのである。

それからまた数年たつて門附けは益々流行らなくなった。五、六年前までは、遠い越後の山の中から来るといふ、角兵衛獅子の姿も、麦の芽が一寸位になった頃、ちらほら見られたけれど、もうこの頃では一人も来ない。木之助の村の胡弓弾きや鼓うちたちも、一人やめ二人やめして、旧正月が近づいたといつても以前のように胡弓のすすりなくような声は聞えず、ぱんぱんと寒い空気の中を村の外までひびく鼓の音も聞えなかった。これだけ世の中が開けて来たのだと人々はいふ。人間が惻口になつたので、胡弓や鼓などの、間のびのした馬鹿らしい歌には耳を藉さなくなつたのだと人々はいふ。もしそうなら、世の中が開けるといふことはどういふつまらぬことだろう、と木之助は思つたのである。

木之助の家では八十八歳まで生きた木之助の父親が、冬中ねていたが、恰度旧の正月の朝、朝日がうらうらとお宮の森の一番高い檜の梢を照し出すころ、恰度天から与えられた生命を終つて枯れる木のように、静かに死んでいった。そのために、数十年来一度も欠かさなかつた胡弓の門附けを、この正月ばかりはやめなければならなかつた。その翌年は、これはまた木之助自身が感冒を患つてうごくことが出来なかつた。味噌屋の御主人が、も

う俺おれが来るずらと思つて待つてござるじやろうに、と仰あおむけ向に寝ている木之助は、枕まくらもと元もとに坐すわつて看病している大きい娘にそう言つては、壁にかかつている胡弓の方を見たのである。

木之助の病氣は癒なほつた。が以前のうな曇りのない健康は歸つて来なかつた。以前は持つことの出来た米俵がもう木之助の腕ではあがつて来なかつた。また子供のときから耕たんでいた田圃たんぼの一畝ひとうねが、以前よりずっと長くなつたように感ぜられ、何度も腰をのぼし、あおつている心臓のしずまるのを待たねばならなかつた。冬がやって来たとき、死んだ父親を苦しめていたあの喘息ぜんそくが木之助にもおとずれて来た。寒い夜は遅くまで咳がとまらなかつた。

しかし今年の正月にはどうあつても胡弓弾きにゆくと、一ひとつき月も前から木之助は氣張きばつていた。味噌屋の御主人にすまんからといった。そして体の調子のよい折を見ては、夜、妻と三番目の娘が、嫁入りよめいの仕度したくに着物を縫かたっている傍で胡弓を奏わらべでた。昼間、藁部屋わらべの陽南ひなたで猫ねこといつしよに陽ひにぬくとまりながら、鳴らしているときは、木之さんも年を喰くつたと村人が見て通つた。

正月の前の晩はひどい寒氣だつた。その日は朝から雪が降りづめで、夜になつて漸ようやくや

んだ。夜はまた木之助の咽喉^{のど}がむずがゆくなり咳が出て来た。裏の竹藪^{たけやぶ}で、竹から雪がどさつどさつと落ちる音が、木之助の咳にまじった。咳の長いつづきがやむと娘が、「お父^{とつ}つあん、そんなふうで明日^{あした}門附けにゆけるもんかい」といった。もう昼間から何度も繰り返している言葉である。

「行けんじやい！」と木之助は痛^{かんしやく}癢^ねを起して嘔^ど鳴^なるようにいった。「おツタのいう通りだ」と女房もいった。

六

「無理して行つて来て、また寝こむようなことになる、僅^{わず}かな錢^{ぜにかね}金^{かね}にや代らないよ」。そして女房は、去年木之助が感冒を患ったとき、町から三度自動車で往診に来たお医者^とに、鶏^{とり}ならこれから卵を産もうという一番^ね値^ねのする牝^{めんどり}鶏^{とり}を十羽買えるだけのお錢^{あし}を払わねばならなかったことをいった。

「明日^{あした}は、ええ日になるだ」。木之助はあれ以来女房や娘に苦勞をかけているのを心の中では済まなく思つて、それでも負け惜しみをいった。「雪の明けの日というものは、ぬく

といええ日になるもんだよ」

「雪が解けて歩くに難儀だよ」と女房がいった。「そげに難儀して行つたところで、今^{いまど}時^{とき}、胡弓など本気になって聴いてくれるものはありやしないだよ」

木之助は、女房のいう通りだと悲しく思った。だが、味噌屋の旦那^{だんな}のことを頭にうかべて、

「まだ耳のある人はあるだ。世間は広いだよ」

と答えた。娘のおツタは待^{まち}針^{はり}でついた指の背を口にふくみながら、勝つあんもやめた、力さんもやめたと、門附けをやめてしまった人々の名をあげてしまいに「いつまでも芸だの胡弓だのいつてるのはお父^{とつ}つあん一人だよ。人が馬鹿だというよ」といった。

「こけでもこけずきでもええだ。聴いてくれる人が一人でもこの娑婆^{しゃば}にあるうちは、俺^{おれ}あ胡弓はやめられんよ」

しばらくみんな黙っていた。竹藪でどきつと雪が落ちた。

「お父つあんも気の毒な人だよ」と女房がしんみりいった。

「もうちつと早くうまれて来るとよかつただ、お父つあん。そうすりや世間の人はみんな聴いてくれただよ。今じゃラジオちゆうもんがあるから駄目^{だめ}さ」

木之助は話しているうちに段々あきらめていった。本当に女房や娘のいう通りだろう。世間が聴いてくれなくなつた胡弓を弾きに雪の道を町まで行くなどはこけの骨頂だろう。それでまた感冒にでもなつて、女房たちにこの上の苦勞をかけることになつたらどんなにつまらないだろう。眠りにつく前、木之助はもう、明日町へゆくことをすっかり諦めていた。

夜が明けて旧正月がやつて来たが、木之助にとつてはそれは奇妙な正月だった。三十年来正月といえば胡弓を抱えて町へ行つた。去年と一昨年はいかなかったが、父親の死と、木之助の病氣というものが余儀なくさせたのである。ところがこんどはこれという理由もないのだ。第一今日一日何をしたらいいのだろう。

天気は大層よかった。雪の上にかつと陽がさして眩しかった。電線にとまつた雀が、その細い線の上に積つていた雪を落すと、雪はきらきら光る粉になつて下の雪に落ちた。外の明るい反射が家の中までさしていた。木之助は胡弓を見ていた。それから柱時計を見た。午前九時十五分前。遠くからカンカンカンと鐘の音が雪の上を明るく聞えて来た。小学校が始まつたのだ。

木之助はまた胡弓を持つて町へゆきたくなつた。こんな風のない空氣の清澄な日は、

一層よく胡弓が鳴ることを木之助は思うのであった。そうだ、ゆこう。こけでも何でもいいのだ、この娑婆に一人でも俺の胡弓を聴いてくれる人があるうちは、やめられるものか。女房や娘はいろいろ言つて木之助をとめようとしたが駄目だった。木之助の心は石のように固かった。

「それじゃお父つあん、町へいったらついでに学用品屋で由太に王様クレヨンを買つて来てやつてな。十二色のが欲しいとじつと（いつも）言っているに」と女房はあきらめていった。「そして早う戻つて来にやあかんに。晩になるときつと冷えるで。味噌屋がすんだらもう他所へ寄らんでまつすぐ戻つておいでやな」

女房のいうことは何もかも承知して木之助は出発した。風邪をひかないようにほつぽこ頭巾をすつぽり被り、足にはゴムの長靴を穿いて。何という変てこな恰好の芸人だろう。だが木之助には恰好などはどうでもよかった。久しぶりに胡弓を弾きに出られることが非常なよろこびだったのだ。

正月といつても村から町へゆく者はあまりなかった。道に積った雪の上の足跡でそれがわかる。二人の人間の足跡、自転車の輪のあとが二本、それに自動車の太いタイヤの跡が道の両側についていた。五、六年前から、馬車の代りに走るようになった乗合自動車のりあいじどうしゃ

が朝早く通つたのである。

陽^ひが生き物のように照つていた。道のわきの田んぼに鳥^{からす}が二羽おりているのが、白い雪の上にくつきり浮かんで見えた。静かだなあと思つて木之助はとつと歩いた。

七

町にはいった。

木之助は一軒ずつ軒づたいに門^{かどづ}附けをするようなことはやめた。自分の記憶をさぐつて見て、いつも彼の胡弓をきいてくれた家だけを拾つて行つた。それも沢^{たく}山^{さん}はなく、味噌屋をいれて僅^{わず}か五、六軒だつたにすぎない。

だがそれらの家々^{まわ}を廻りはじめて四軒目に木之助は深く心の内に失望しなければならなかつた。どの家も、申しあわせたように木之助の門^{ことわ}附けを辞つた。帽子屋では木之助が硝^ガ子戸^{ラスド}を三寸ばかり明けたとき、店の火鉢^{ひばち}に顎^{あご}をのせるようにして坐^{すわ}つていた年寄りの主人が瘦^やせた大きな手を横に振つたので木之助は三寸あけただけでまた硝子戸をしめねばならなかつた。また一昨々年まで必ず木之助の門附けを辞らなかつた或^あるしもた家^やには、木之

助があけようとして手をかけた入口の格子硝子に「諸芸人、物貰い、押売り、強請、一切おことわり、警察電話一五〇番」と書いた判紙が貼つてあつた。また或る店屋では、木之助が中にはいつて、ちよつと胡弓を弾いた瞬間、声の大きい旦那が、今日はごめんだ、と怒鳴りつけるような声で言つたので、木之助はびくつとして手をとめた。胡弓の音もびつくりしたようにとまつてしまつた。

もうこれ以上他を廻るのは無駄であると木之助は思つた。そこで最後のたのしみにとつておいた味噌屋の方へ足を向けた。

門の前に立つた時木之助はおやと思つた。そこには見馴れた古い「味噌溜」の板看板はなくなり、代りに、まだ新しい杉板に「※味噌醬油製造販売店」と書いたのが掲げられてあつた。それだけのことで、木之助にはいつもと様子が變つたような、うとましい氣がした。門をくぐつてゆくと、あの大きい天水桶はなくなつていた。そして天水桶のあつたあたりには、木之助の嫌いな、オート三輪がとめてあつた。

「ごめんやす」とほつぽこ頭巾をぬいで木之助は土間にはいつた。

奥の方で、誰か来たよといつてゐるのが静けさの中をつつぬけて來た。やがて誰かが立つてこちらへ來る氣配がした。木之助はちよつと身繕ひした。だが衝突の陰から、始

めて見る若い美しい女の人が出て来て、そこに片手をついてごんだときはまた面くらった。

「あのう」といつて木之助は黙った。言葉がつづかなかった。それから一つ咳せきをして「ご隠居おんきょは今日はお留守るすでござえますか。毎年ごひいきに預っています胡弓弾きが参りましたと仰おつしや有あつて下せえまし」といった。

女の人が引つ込んでいつて、低声こごえで何か囁ささやきあっているのが、心臓の高鳴りはじめた木之助の神経を刺戟しげきした。やがてまた足音がして、こんどは頭をぴかぴかの時分ときわけにし、黒い太い縁ふちの眼鏡めがねをかけた若主人が現われた。

「ああ、また来ましたね」と木之助を見て若主人はいった。「君、知らなかったのかね、親父おやじは昨年おとしの夏なくなつたんだよ」

「へっ」といつて木之助はしばらく口がふさがらなかつた。立っている自分に、寂しさが足元から上つて来るのを、しみじみ感じながら。

「そうでござえますか、とうとうなくなられましたか」。やつと気を取り直して木之助はそれだけいった。

木之助はすすごと踵くびすをかえした。闕しきいつまずに躓つまずいて、も少しで見苦しく這はいつくばうところ

だった。右足の親指を痛めただけで胡弓をぶち折らなかつたのはまだしも仕合わせといふべきだった。

門を出ると、一人の風呂敷包みを持った五十位の女が、雪駄の齒につまつた雪を、門柱の土台石にぶつけて、はずしていた。木之助を見ると女の人は、おや、と懐しそうにいった。木之助は見て、その人がこの家の女中であることを知った。彼女は三十年前、木之助が始めて松次郎と門附けに来たとき、主人にいつけられて御馳走のはいった皿を持って来た、あの意地の汚なかつた女中である。来る年も来る年も木之助は彼女を味噌屋の家で見た。木之助が少年から大人へ、大人からやがて老人へと成長し年とっていったように、彼女は見る年ごとに成長し年とっていった。二十五位のとき彼女は一度味噌屋から姿を消し、それから五、六年は見えなかつたが、再び味噌屋へ戻つて来た時は一度に十も年をとつたように老けて見えた。その時彼女は五つ位になる女の子を一人つれて来た。木之助は御隠居から、彼女の身の上を少しばかりきかされた事があつた。彼女は不仕合わせな女で一度嫁いだ夫に死なれたので、女の子をつれてまた味噌屋へ奉公に戻つて来たのだそうである。その時以来彼女はずっとこの家から出ていかなかった。若かつた頃は意地が悪くて、木之助を見ると白い眼をして見下したが嫁いだ先で苦勞をして戻つてからは、人が変

つたように大人おとなしくなったのである。

八

「お前さん、しばらく見えなかっただね、一昨年おとしの正月も昨年おとしの正月もなくなられた大旦那おんなが、あれが来ないがどうしたろうと言っておらしたに」

「ああ、去年は大病おわやみをやり、一昨年は恰ちやうど度旧正月の朝親父おれが死んだもので、どうしても来られなかっただ。御隠居も夏死おれなしたそうだな。俺おれあ今きいてびっくりしたところだよ」と木之助はいった。

「そうかね、お前さん知らなかっただね」と年とつた女中はいって、それから優しく咎とがめるような口調で言葉をついだ。「去年の正月はほんとに大旦那はお前さんのことを言っておらしただに。どうしよつただろう、もう門附かどづきけなんかしてもつまらんと思おもって止やめよつただろうか、病氣やまいでもしていやがるか、つてそりや氣きにして見えただよ」

木之助は熱いものがこみあげて来るような氣がした。「ほうかな、ほうかな」といつてきいていた。

年とつた女中はそれから、もう一ぺんひつ返して、大旦那の御仏前ごぶつぜんで供養くように胡弓を弾くことをすすめた。「それでも、若い御主人が嫌きらうだろ」と木之助がしりごむと、女中は、「なにが。わたしがいるから大丈夫だよ」と言つて木之助をひっぱつていった。

女中は木之助を勝手口の方から案内し、ちよつとそこに待たせておいて奥へ姿を消したが、直じきまた出て来て、さあおあがりな、と言つた。木之助は長靴をぬいで女中のあとに従つて仏間ぶつまにいった。仏壇は大きい立派なもので、点とちされた蠟燭ろうそくの光に、よく磨みがかれた仏具や仏像が金色にぴかぴかと煌きらいていた。木之助はその前に冷えた膝ひざを揃そろえて坐すわると、焚たかれた香こうがしめつぽく匂におつた。南無阿弥陀仏なむあみだぶつと唱えて、心から頭をさげた。深い仏壇の奥の方から大旦那がこちらを見ているような気がしたのである。

「そいじや、何か一つ、弾いてあげておくれやな」と背後に坐つていた女中がいった。木之助は今までに仏壇むかに向つて胡弓を弾いたことはなかったので、変なそぐわなない気がした。だが思い切つて弾き出して見ると、じきそんな気持ちは消えた。いつ弾く時でもそうであるように、木之助はもう胡弓に夢中になつてしまった。木之助の前にあるのもう仏壇というような物ではなかった。耳のある生物だった。それは耳をそばだてて胡弓の声にきき入り、そののんびりしたような、また物哀もののなしいような音色ねいろを味わつていた。木之助は一

心にひいていた。

門を出ると木之助は、道の向う側からふりかえって見た。再びこの家に訪ねて来ることはあるまい。長い間木之助の毎日の生活の中で、煩わしいことや冗らぬことの多い生活の中で竜宮城のように楽しい想いであつたこの家もこれからは普通の家になったのである。もはやこの家には木之助の弾く胡弓の、最後の一人の聴手がいないのである。

木之助はすつぽりほつぽこ頭巾をかむつて歩き出した。町の物音や、眼の前を行き交う人々が何だか遠い下の方にあるように思われた。木之助の心だけが、群をはなれた孤独な鳥のように、ずんずん高い天へ舞いのぼつて行くように感ぜられた。

ふと木之助は「鉄道省^{はらいさ} 下げ品、電車中遺留品、古物^{ふるもの}」と書かれた白い看板に眼をとめた。それは街角^{まちかど}の、外から様々な古物の帽子や煙草^{たばこ}入れなどが見えている小さい店の前に立っていた。木之助は看板から自分の持つている胡弓に眼をうつした。聴く人のなくなつた胡弓など持つていて何になろう。

誰かに逆う^{さから}ように、深くも考えずに木之助はその硝子戸^{ガラスど}をあけた。

「これいくらで取つてもらえるだね」

青くむくんだ顔の女主人が、まず、

「こりや一体、何だい。三味線しやみせんじゃない。胡弓か、えらい古い物だな」と男のような口のきき方をして、胡弓をうけとった。そして、あちこち傷いたんでいないか見てから、

「こんなものは、買えない」とつき返した。

「買えんということはねえだろうがな」と木之助は気が立っていたので口をとがらせていった。「古物屋が古物を買えんという法はねえだら」

「古物屋だとて、今どき使わんようなものはどうにもならんよ。うちは骨董屋こつどうやじゃねえから」

二人はしばらく押問答おしもんどうした。女主人は買わぬつもりでもないらしく、

「まあ、そうだな。三十銭でよかったら置いてゆきな」といった。

九

木之助はあまり安い値ねをいわれたので腹が立ったが、腹立ちまぎれに、そいじゃ売ろうといつてしまった。木之助は外に出ると何だかむしように腹が立ったが、その下にうつろな寂さびしい穴がぽかんとあいていた。

少しゆくと鉄柵てつさくでかこまれた大きい小学校があつて、その前に学用品を売る店が道の方を向いていた。末っ子の由太のためにたのまれた王様クレヨンを買った。小僧がそれを包み紙で包むのを待っている間に、木之助の心は後悔の念に嚙かまれはじめた。胡弓を手ばなした瞬間、心の一隅いちぐうに「しまった」という声が上がった。それが、今は段々大きくなつて来た。

クレヨンの包みを受けると木之助は慌あわてて、ゴムの長靴ながぐつを鳴らしながら、さっきの古物屋の方へひつかえしていった。あいつを手離してなるものか、あいつは三十年の間私につれそうて来た！

もう胡弓が古帽子や煙草入れなどと一緒に、道からよく見えるところに吊つるしてあるのが、木之助の眼に入つた。まだあつてよかつたと思つた。長い間逢あわなかつた親しい者にひよいと出逢つたように懐なつかしい感じがした。

木之助は店にはいつて行つて、ちよつと躊躇ためらいながら、いった。

「ちよつと、すまないが、さっきの胡弓は返してくれんかな。ちよつと、そのう、都合の悪いことが出来たもんで」

青くむくんだ女主人は、きつい眼をして木之助の顔を穴のあくほど見た。そこで木之助

は財布さいふから三十銭を出して火鉢ひばちの横にならべた。

「まことに勝手なことといってすまんが、あの胡弓は三十年も使って来たもんで、俺おれのかかあより古くから俺につれそっているんで」

女主人の心を和やわげようと思って木之助はそんなことをいった。すると女主人は、

「あんたのかかあがどうしただか、そんなこと知らんが、家うちあ商売してるだね。遊んで
いるじゃねえよ」といって、帳面や算盤そろばんの乗っている机に頤杖あごづえをついた。そしてまた
いった。「買いとつたものを、おいそれと返すわけにやいかんよ」

これはえらい女だなと木之助は思いながら「それじゃ、売ってくれや、いくらでも出す
に」といった。

女主人はまたしばらく木之助の顔を見ていたが、

「売ってくれというなら売らんことはないよ、こっちは買って売るのが商売だあね」とち
よつとおとなしく言った。

「ああ、そいじゃ、そうしてくれ。いやどうも俺の方が悪かった。それじゃもういくら上
げたらいいかな」と木之助はまた財布を出して、半ば開いた。

「そうさな、他ほかの客なら八十銭に売るところだが、お前さんはもとを知つとるから、六十

錢にしとこう」

木之助の財布を持っている手が怒^{いか}りのために震えた。

「そ、そげな、馬鹿なことが。あんまり人の足元を見やがるな。三十錢で取つといて、三十分とたたねえうちに倍の値で——」

「やだきや、やめとけよ」と女主人は遮^{さえぎ}つて素^す氣なくいった。

木之助は財布の中を見るときもう十五錢しかなかった。いつもの習慣で家を出るとき金を持って出なかった。で、さつき由太のクレヨンを買うときは、味噌屋で貰^{もら}ったお錢^{あし}で払つたのだ。十五錢はその残りだった。

火鉢の横にならべた三十錢を一枚一枚拾つて財布に入れると、木之助は黙つて財布を腹の中へ入れた。そして力なく古物屋を出た。

午後の三時頃だった。また空は曇り、町は冷えて来た。足の先の凍えが急に身に沁^しみた。木之助は右も左もみず、深くかがみこんで歩いていった。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集第三巻」大日本図書

1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行

初出：「哈爾賓日日新聞」

1939（昭和14）年5月17日～5月27日

入力：浜野 智

校正：浜野 智

1999年3月1日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

最後の胡弓弾き

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>